

『新釈漢文大系』史記十「蒙恬列伝二十八」

【原文】

喪至咸陽、已葬、太子立爲二世皇帝。

而趙高親近、日夜毀惡蒙氏、求其罪過、舉劾之。

子嬰進諫曰、臣聞故趙王遷、殺其良臣李牧、而用顏聚、燕王喜陰用荊軻之謀、

而倍秦之約、齊王建殺其故世忠臣、而用后勝之議。

此三君者、皆各以變古者、失其國、而殃及其身。

今蒙氏、秦之大臣謀士也。而主欲一旦弃去之。

臣竊以爲不可。臣聞輕慮者不可以治國、獨智者不可以存君。

誅殺忠臣、而立無節行之人上、是內使羣臣不相信、而外使鬪士之意離也。

臣竊以爲不可。

胡亥不聽、而遣御史曲宮乘傳之代、令蒙毅曰、先主欲立太子、而卿難之。

今丞相以卿爲不忠。罪及其宗。朕不忍、乃賜卿死。亦甚幸矣。卿其圖之。

【読み下し文】

喪威陽に至り、已に葬り、太子立つて二世皇帝と為る。而うして趙高親近せられ、日夜、蒙氏を毀悪し、その罪過を求め、之を擧劾す。

子嬰進み諫めて曰く、臣聞く故の趙王遷は、其の良臣李牧を殺して、顔聚を用ひ、燕王喜は陰かに荊軻の謀を用ひて、秦の約に倍き、齊王建は、其の故世の忠臣を殺して、后勝の議を用ひたり、と。

此の三君は、皆各々古者を變ぜしを以て、其の國を失ひて、殃、其の身に及べり。今蒙氏は、秦の大臣謀士なり。而るを主、一旦に之を棄て去らんと欲す。

臣、竊かに以て不可なりと爲す。臣聞く、經慮は、以て國を治む可からず、獨智は、以て君を存す可からず、と。

忠臣を誅殺して、節行無きの人を立つ、是れ内は羣臣をして相信ぜざらしめて、外は鬪士の意をして離れしむるなり。臣竊かに以て不可なりと爲す、と。

胡亥聴かずして、御史曲宮を遣り、傳に乗りて代に之き、蒙毅に令せしめて曰く、先主、太子を立てんと欲し、而うして卿之を難ぜり。今、丞相、卿を以て不忠と爲す。罪、其の宗に及ぶ。朕忍びず、乃ち卿に死を賜ふ。亦甚だ幸ひなり。卿其れ之を圖れ、と。

【通釈】 始皇帝の喪車そうしゃが都咸陽みやこかんように着き、始皇帝が葬ほうむられたあと、太子たいしは即位して二世皇帝となった。そして、趙高ちようこうは側近として親任され、日夜蒙氏ひょうしを誹謗ひぼうして、その罪過ざいごを捜し求めて弾劾だんがいした。子嬰しえい（胡亥こがいの甥おい）は進み出て諫めて言った、「私が聞いておりますには、もとの趙王ちようおうの遷せんは、その良臣りょうしんの李牧りぼくを殺して顔聚がんしゅうを用い、燕王えんおうの喜きは、密かに荊軻けいこの謀はかりごとをとりあげて秦との約束にそむき、齊王せいおうの建けんは、前代からの忠臣を殺して后勝こうしょうの建議けんぎをもちいました。これらの三君は、みなそれぞれ古いにしえの道を変えたことでその国をも失い、災いは自分の身にまでも及びました。今、蒙氏もうしの者たちは、秦しんの大臣だいじんや謀士ぼうしであります。しかるにわが君きみが、一朝いちじゅうにしてそれを棄て去ろうとお考えであるのは、よろしくないことと愚考ぐこいたします。私わたくしは、『思慮しりょが軽々しくては国を治められず、独断専行どくたんせんぎょうには走つては君を保つことができない』と聞いております。忠臣ちゆうしんを死刑にして、節操せつそうなき者（趙高）をお取り立てなさいますと、国内では群臣ぐんしんがたがいに信じなくなり、国外では戦士たちの意を離れさせてしまいます。わたしは、よくないことと存じます」と。

しかし、胡亥は聞き入れず、御史ぎよしの曲宮きよくきゆうを派遣して、馭馬車ぎま車を乗りついで代に行かせ、蒙毅もつぎに命令した。「先帝は太子である私を立てる考えであつたものを、汝なんじがこれを非難した。今、丞相じようしやう（李斯りし）は汝が不忠であると考えている。その罪は汝の一族にまで及ぶ。朕ちんは忍びない。そこで、汝に死を与える。なんと幸運なことか、よくよく考慮せよ」と。

【語釈】

○喪・・・始皇帝の喪車をさす。

○咸陽・・・今の陝西省咸陽市の東北。

○毀悪・・・誹謗中偶すること。

○挙劾・・・弾劾すること。

○子嬰・・・〔人物〕嬴子嬰のこと。胡亥の甥。後に趙高に擁立されて秦王となる。在位わずかに四十六日。劉邦が峽陽に攻め入り、投降して、後項羽に殺される。

○趙王遷・・・〔人物〕前三三五～前二二八年在位。秦の捕虜となる。

○李牧・・・〔人物〕趙の將軍。趙王は秦の離間策にかかり、李牧を殺した。詳しくは『廉頗藺相如列伝』参照。

○顔聚・・・〔人物〕もと斉の將軍。趙王は寵臣郭開の言を聞き、顔聚を李牧に代えた。

○燕王喜・・・〔人物〕姫喜。前二五四～前二二二年在位。秦の捕虜となる。

○刑軻・・・〔人物〕衛国の人。前二二七年、燕の太子丹に派遣されて秦王を暗殺しようとするが成らず、殺される。詳しくは「刺客列伝」参照。

○齊王建・・・〔人物〕田建。前二六四～前二二二年在位。秦の捕虜となる。

○故世忠臣・・・前代の忠臣のこと。

○后勝・・・〔人物〕齊王建の相。前二二一年、秦の兵が齊に攻め入り、建は后勝の意見を信じて秦に投降し、ついに齊を滅亡させた。

○議・・・建策のこと。

○快・・・わざわいのこと。

○独智・・・独断専行すること。

○無節行之人・・・『考証』に引く凌稚隆の注では、「無節行之人」とは、暗に趙高をさす、という。節操のない人間のこと。

○曲宮・・・〔人物〕「曲」は姓、「宮」は名。

○伝・・・馭あるいは馭伝の車馬こと。

○之……ゆき至ること。

○宗……宗族のこと。

○凶……考慮すること。

【余説】子嬰の諫言について董份は、「子嬰のこの諫言は非常に正しいといえることができる。しかし、もし趙高の感情を害していたら、危険を免れず、悪者を懲らしめた誉となることはなかった」といい。揚慎は、「子嬰は蒙恬が無実の罪であることを知って進み出て諫めたが、これはのちに趙高の邪さを照らして賊を討つことになったのである。賢といえよう」という。

○董份（とうぶん）……〔人物〕中国・明代（十六世紀）に活躍した政治家・学者。

経歴…科挙の進士に合格。後に礼部尚書（文部・儀礼の大臣）などの要職を歴任した。

学問的立場…当時の大思想家である李卓吾（李贄）と親交が深く、伝統的な儒教にとらわれない批判的で鋭い歴史観を持っていた。

○揚慎（ようしん）……〔人物〕中国・明代（十六世紀）を代表する学者、文学者、詩人。

自著『丹鉛録』などの随筆において、歴史上の人物や事件を鋭く評論している。

彼は、暗愚な皇帝・胡亥と奸臣（趙高）が権力を握る絶望的な状況下で、一人正論を吐いた子嬰の勇氣と先見性を高く評価した。